

嘘と真実と、
ぼく

最近、ぼくの頭の中で、色々な考えがぐるぐると回っている。どうやってまとめたらいいかも分からないから、ほったらかしだ。そうすると、ますます混乱する。混乱するからぐるぐる回る……この繰り返し。

ただ分かっているのは、このままじゃいけない、ってということだけ。でも、どうすればいいんだろう——。

「ねえ、リチャード」

ぼくがぼんやりしていたら、マリアがぼくに声をかけた。何も悪いことは考えていなかったのに、声をかけられた途端、思わずどきとした。目の前に広げていた本を、パタンと音をたてて閉じてしまった。

「何？」

悪戯しているのが見つかったときみたいな感じだ。マリアはぼくの様子に気づいているのかわからないのか、こう続けた。

「ウィリアムは、いつ帰って来るのかしら？」

——ただ。ぼくはそう思ったけれど、声にも表情にも出さない。気づいてみたら、そうするのにすっかり慣れていた。ぼくは、首を振った。

「分からないんだ。まだ連絡がなくって……」

マリアはうつむいた。そうすると長いまつ毛がいつそう目立って、見つめられているわけでもないのにドキドキする。

「そうなの……」

泣きたいのを、一生懸命我慢している。ぼくは、心の奥底からぷかぷかと浮かびかけたものを、必死で押さえつけた。たまにこうやって、浮かび上がろうとしてくるんだ。今は何とか押さえつけているけど、いつかぼくの力では、押さえきれなくなるだろう——。

ぼくが孤独な戦いを続けていると、マリアはふうっと息をついてぼくを見た。

「ウィリアムは優秀だから、何か任務を命じられているのかもしれないものね。それで忙しくて、お手紙も書けないんだわ。そうでしょ？」

ぼくは反射的にうなずいた。そう思っていないと、ぼくだってやってられない。

すると、マリアはにっこり笑った。

「ね。だから明日、ウィリアムにお手紙を書くわ。読む時間は、あるでしょうから」

そう言ってから、膝の上に置いたままにしていた本を手にする。

「今日のうちに、先生に言われたところを暗記しないと……そうしたら、明日一日、じっくりお手紙が書けるもの」

「——そうだね」

そう返事するのがやっとだった。ぼくは閉じてしまった本を開こうとしたけれど、もともと内容が頭に入っていなかったから、開いていたページがどこだったか忘れてしまった。でもとりあえず適当なページを開いて、読むふりをする。

ぼくは小さいころに、遊んでいて木登りに失敗して落ちたときの怪我がもとで、体が思うように動かせない。生きていくための最低限のことはできるけれど、力仕事は全然だ。農作業なんて

、とても無理。金持ちでもない、ただの農家に生まれたのにこんな状態になってしまった。普通だったら、受け入れてくれる修道院があったら幸運、という身の上だ。

でも、ぼくの場合は事情が違った。ちょうど、村の大地主の家には病弱な末娘のマリアがいた。外出も思うようにならない彼女のことが、親にとっては心配で仕方ないらしい。当たり前だけれど……。マリアの親にしてみたら、ぼくは彼女の相手をするのにちょうどよい人間と映ったようだ。

ぼくはマリアの話し相手・遊び相手に選ばれた。ぼくにも仕事ができる。毎日のようにマリアの家に行って、相手をしてあげる。その報酬として、ぼくの両親はいくらかのお金を得た。ぼくはマリアと一緒に教育を受けることを許された。ぼくは9歳で、彼女は6歳だった。

初めて会ったとき、彼女は恥ずかしそうにメイドの後ろに隠れながら、ぼくを見ていた。でも、末っ子らしく寂しがりやで人なつこい性格で、ぼくを見て本当に嬉しそうに笑った。

「リチャード……これから毎日、遊びに来てくれるんでしょ？ 私、とっても嬉しい。仲良くしてね」

屈託のない笑顔に、ぼくは自分の頬が赤くなるのを感じた。役立たずだと思っていた自分に、たとえ女の子の遊び相手でも、何か仕事があるというのは嬉しかったから。頬が赤くなったのは、それだけが理由ではないけれど……。

週末以外は、どちらかの体調が悪くない限り、毎日のようにマリアの家に行った。一緒に本を読んだり、勉強したり。マリアの体調もよくて暖かな日には、小高い丘におべんとうを持って出かけて、お昼を食べることもあった。一緒にいる時間が長いから、本当の兄妹みたいにして育った。ぼくは豊かでもない農家の息子だけれど、マリアの家族もぼくにはとてもよくしてくれている。

ウィリアムは、ぼくより3歳年上で、体が大きくて力も強い。しかもそれだけじゃなくて、性格もいい。この村の若者で一番頼りになる。ぼくなんかとは、天と地ほどの違いだ。マリアとぼくのことにも気遣ってくれて、そんなにしょっちゅうではないけれど、様子を見に来ていた。ぼくもマリアも、ウィリアムに会うのが楽しみだった。

ぼくはマリアにとっては、「お兄ちゃん」でしかない。でも、ウィリアムがそういう存在じゃないのは、ぼくにだって分かった。だって、見る目が違う。ウィリアムを見る彼女の瞳に、ぼくを見るときとは違う光が浮かんでいるのを見ると、複雑な気持ちになる。でも、ぼくとウィリアムと、どっちがかっこいいかっていうのははっきりしてるから、何も言えない。

数ヶ月前に、隣の国との戦争で、屈強な若者が何人も軍隊に行った。この村の青年も、何人も出征した。その中には当然、ウィリアムもいた。みんな、彼らの帰還を待ち望んでいた。ぼくはこんな体だから、徴兵なんかされるわけがない。戦争はそんなに長くは続かなかった。戦争の結果で、国境線が変わったということもなかった。一体、何のための戦争だったんだか。

国境線が変わらなかったからと言って、負傷者や戦死者が出なかったわけではない。そう言えば分かるだろう？ ウィリアムはもう帰って来ないんだ。他のみんなは無事に帰って来たというのに。彼みたいに賢くて逞しい人間であっても、ぼくみたいな役立たずであっても、死は平等に訪れる。でも、こういう訪れかたは、ちょっと不平等かもしれない。悲しみに暮れる中で、ふとそう思う一瞬があった。

——でも。マリアはそのことをまだ知らない。ちょうどウィリアムの戦死の知らせが来たころ、彼女の体調はものすごく悪かった。余計な刺激になりはしないかと心配する彼女の両親に口止めされて、ウィリアムのことについてはしばらく黙っていることにした。

そうしたら、本当のことを言う機会を逃してしまった。マリアは、戦争が終わったことを知っている。ただ、ウィリアムが戦死したことは知らない。ウィリアムが帰って来る日を、今日か今日かと待っている。

.....今さら、彼女に何て言えばいいと思う？

決心

嘘はいけないことだ。だけど世の中には、罪にならない嘘があると言う。マリアにウィリアムの戦死を知らせないのは、そういう罪にならない嘘——white lie——だと言う。それはぼくにも分かる。

でもさ、毎日のように嘘を言わなきゃいけない立場にもなってみてくれ。……辛いよ。本当に辛いんだ。ぼくの心は、コップに水が入っているようなもの。マリアに嘘をつくたびに、ぼくの心に黒いインクが一滴、ポトンと落ちる。今はまだ、水にインクが入っているなんて見えない。

——でも、こうやってずっと黒いインクのしずくが落ちていって、コップの中の水がどんどん濁ってきたら……どうなると思う？ そうなってしまったときのことを考えると、ものすごく怖い。ぼくはどうなってしまうのか、誰にも分からない。

マリアに会いたいとは思っているけれど、ウィリアムのことで嘘をつかなきゃいけないのは嫌だ。そうは思うけれど、本当のことを知ったときにマリアがどれだけ悲しむのか、考えるのも辛い。体調を悪くしてしまうんじゃないか——もっと最悪の事態になるのかもしれないし。

でも、そんなふうに考えながら嘘をついているうちに、こっちの体調も悪くなってきた。朝になると、お腹と頭が痛くなる。気付かないうちに、ぼくの頭が「嫌だ！」って叫んでるんだ。今日は無理やり来たけど、明日はどうなるかさっぱり分からない。

「なんだか最近のリチャードは、ため息をついてばかりね」

マリアにそう言われて、思わずため息をついてしまった。ぼくの反応に、屈託なく笑う。

「今言ったばかりなのに……」

明るい笑顔を見ると、こっちの心はどんよりと曇る。曇りどころじゃなくって、どしゃ降りだ。ぼくの様子に、彼女は眉をひそめる。

「本当に、変だわ。体の具合が悪いの？ 無理しないでね」

「ありがとう」

ぼくは心を決めた。帰りがけに、マリアの母親のところに立ち寄った。

「奥様……」

刺繍をしていた母親は、視線をあげてぼくを見た。

「あら、リチャード。どうしたの？」

「お話があります」

ぼくがそう言うと、彼女は自分の隣の椅子をすすめてくれた。ぼくは単刀直入に言うことにした。

「——奥様、ぼくはもう、マリアに嘘をついているのには耐えられません」

彼女もふうっと息をついた。

「ウィリアムのことね。こうやってずっと嘘を言って、あの子が本当のことを知る日が遅ければ遅れるだけ、あの子も傷つくし……」

そしてぼくをまっすぐに見る。

「当然あなたも傷ついているでしょう。ごめんなさいね」

母親に謝られるとは思っていなかったのだから、ぼくは恐縮した。でも、ぼくは思うことをはっきり言った。

「だから、マリアに本当のことを言いたいんです。明日か明後日か、いつになるかは断言できないんですが」

彼女は窓の外を見た。しばらく考えてからぼくを見る。

「そうね……そうするべきね。主人には私から話しておきますから、あなたの思うようになさい。ただ——」

髪をかきあげた。

「私達には残念なことです、マリアが一番心を開いているのはあなたなのです、リチャード。だから、何があってもあの子を受け入れてあげて」

ぼくはうなずいた。

本当のことを言うのは気が重いけれど、嘘を口にしながら続けるのはもっと嫌だ。だからぼくは、マリアに何と言われようと構わない。

勇気

心は決めたいけれど、こういうことはどう言えばいいんだろう……。どうしたら、マリアの悲しみが大きくなるように言えるかな。寝台の中でぼくは寝返りをうった。ウィリアムが戦死したっていうのは、厳然とした事実だ。これは変えられない。でも、それをどう彼女に告げるかで、彼女の悲しみの大きさや強さは変えられるはずだ……。

そうやって考えているうちに眠ってしまった。結局どの程度まで何を考えていたかも分からない。気付いたら朝だった。でも、昨日までみたいな腹痛も頭痛もない。だからマリアの家に行く心も足取りも、今までより軽かった。ぼくを見て、彼女は安心したように笑った。

「よかった。病気じゃなかったのね」

ぼくはうなずいた。

「今日は天気がいいから、お昼は外で食べましょうよ」

彼女は明るい表情を見せる。もう昼食の準備をしてもらっていると言う。ぼくはうなずいた。

「そうだね。久しぶりに外で食べるのもいいね」

バスケットにパンとハムと飲み物をつめて、ぼくたちは外に出た。太陽の光は丘陵に降り注ぎ、爽やかな風が通り抜ける。母屋からもそう遠くない小高い丘の上にある木陰に、ぼくたちは腰を下ろした。

マリアは思い切り体を伸ばす。ポーズは違うけど、猫みたいだと思った。

「こんなに過ごしやすい時期は短いから、十分に楽しまないと」

彼女はそう言いながら、柔らかな草の上に横になる。でもすぐに体を起こした。

「こんなことしている場合じゃないのよね。なんだかお腹が減って……リチャードは？」

「ぼくもだ」

そこで早速お昼の時間となった。いつもと同じなのに、外で食べると何となく気分が違う。飲み物が今日は特別にいちごジュースなのも嬉しかった。

「バスケットが軽くなったから、帰りは楽だよ。空っぽだ」

ぼくが言うと、マリアは首をすくめて笑った。わざとよそよそしく言う。

「感謝して下さってありがとう。私もおいしくいただいた甲斐がありますわ」

ぼくたちはこらえきれずに大笑いして、そのまま地面に2人とも仰向けになった。遠くで鳥が鳴いている。しばらくそのままじっとしていたら、マリアがぽつんと言った。

「なんだかとっても静かね」

「母屋や農場からも、そんなに遠くないのにね……人の話し声も、家畜の鳴き声も聞こえない」

ぼくの言ったことを聞いているのかいないのか、彼女は青い空を葉や梢の間から眺めながら、元気のない声で言う。

「この村はずっとこんな感じだったもの、戦争があったって聞いても、信じられない」

彼女にも聞こえるのではないかと思うほどに、ぼくの心臓が大きな音をたてる。この言葉の後に、何を言うんだろう——でも、何にせよ、ぼくが本当のことを言うべきなのは今か？

ぼくは自分の心の底に沈んでいた——もっと正確に言えば無理やり沈めていた——ものが、水音を立てて浮かび上がってくるのを感じた。もう、上から押さえつけるものはない。ぼくは覚悟を決めた。

「——マリア」

緊張感が伝わったのか、ぼくが体を起こすのを見て、彼女もゆっくりとそれに続いた。表情が

わずかに硬くなる。

「どうしたの……？」

気のせいかもしれないけれど、緑の葉が彼女の表情に暗い翳を投げかけた。

「ぼくは、謝らなくちゃいけない」

「謝る？」

マリアは首をかしげた。ぼくは声を出そうとしたけれど、一瞬喉に引っかかる。ええい、まだ躊躇してるのか、ぼくは。駄目だ。このままでは、ぼくもマリアも不幸になる。だから言うんだ。声よ、出て来い。

「——嘘をついていた」

かすれた声だった。短い言葉を口にするのに、こんなに苦労したことはない。嘘、という言葉にマリアはうつむいた。でもこれから先の言葉は、もっと言いづらい。

「ウィリアムはもう戻ってこない」

何だか遠まわりな表現。ぼくは途切れ途切れになりそうな話を、必死でつなぎ合わせた。

「戦争が終わってしばらくしてから、彼の戦死の知らせがあった。ちょうど、マリアの体調が悪かったころだったから……ぼくは黙っててくれって頼まれた。それで言えなかった——」

彼女は何も言わない。少しの沈黙。ぼくはそれが怖くて、さらに言葉が続けた。

「そうしたら、いつ言ったらいいのかわからなくなって、結局ずっと嘘をつくことになった……。でも、このまま『いつかウィリアムは帰ってくるよ』なんて言い続けるわけにもいかない。ぼくは、もう嘘を言い続けるのは耐えられない——。君が真実を知るのをこれ以上延ばすのも、よくないと思ったんだ」

マリアは静かに泣いていた。ただ涙がすーっと頬を流れるだけだった。どう声をかけていいものかわからない。彼女の様子を黙って見ているのが、一番辛かった。やがて顔をあげて、まっすぐにぼくを見る。瞳が涙に濡れて複雑な光をたたえている。ぼくはまるで、心臓がその瞳の放つ矢に射抜かれたように感じた。

「リチャードはずるい……」

彼女はぼくと同じくらい、言葉を出すのが大変みたいだ。当然だ。

「ウィリアムがもう戻ってこないかもしれない、っていうのは、薄々感じてた。その話をする、リチャードは本当に辛そうな顔になったから——」

こらえきれなくなった嗚咽が漏れる。

「リチャードはこの話をする心の準備ができてるから、いいわよ。でも私は……突然そんなふうになっても、どうしていいのかわからない……いくら覚悟していても……」

白くて細い小さな手が、彼女の顔を覆う。

——リチャードはずるい。

そう言われたぼくは反論できなかった。だって彼女の言うとおりだから。だからと言って、『明日は大切な話があるから、心の準備をしておいて』とも言えない。彼女の非難は第三者から見たら理不尽かもしれない。でもぼくにしてみれば道理だった。

午後の陽射しが強まったぶん、木陰が暗くなる。2人で深い湖の底に沈んでしまったようにさえ感じた。遠くに聞こえたはずの鳥の鳴き声さえ耳に入らない。風の音もしない。空気が動かなくなったように感じる。耳に入るのは、彼女のすすり泣く声だけ。

……どうしていいかわからなくて、ぼくはしばらくそのまま黙っていた。

どれくらい時間が経ってからか、ようやく風が頬に当たるのを感じた。時間が止まってしまったわけではないことが分かって、ぼくは安心した。こんな状態のままでいなければいけないのは、地獄に落ちるのに等しい。

「——帰りましょう。ここにいるのは辛い」

小さな声で、マリアが言った。でも、彼女の顔をまっすぐには見られない。『辛い』という言葉の意味がよく分からないままのぼくに、彼女が重ねて言う。

「戻ってこないウィリアムのことを思うには、ここは平和すぎるもの……」

それはぼくも同感だ。ぼくたちはのろのろと立ち上がり、母屋に戻ることにした。無言のままだった。彼女も何も言わないし、ぼくも何も言わなかった。気持ちは明るくはなかったけど、足取りが軽かったのは意外だった。ぼくはやっとの思いで大きな荷物をおろしたけれど、また大きな荷物を背負ってしまったのかもしれない。

ぼくたちの雰囲気から、使用人たちも何があったか察したらしい。静かな緊張感が母屋を包み込んだ。マリアはひとりで、壁に向かった勉強机に座る。彼女の背中を見ながら、ぼくはテーブルに向かって座った。

……言いたいことだけ言って、マリアが悲しんでいるのを放っておくわけにもいかない。かと言って彼女の気持ちも考えずに、こちらからまくしたてるのも——。『何があってもあの子を受け入れてあげて』マリアの母親の言葉を思い出した。一番心を開いてくれる相手に、出来る限りのことをしなくては。ぼくは慎重に言葉を選んだ。

「マリア」

ぼくの言葉に反応して、彼女の細い背中が震えた。返事はなかった。

「——ぼくは、マリアのために出来ることなら、何でもするよ。ウィリアムのこと、きちんと話せなかった罪滅ぼしになれば……。偉そうな言い方になっちゃうけど」

それでも返事はなかった。ぼくは思わず、肩で息をついていた。

「そうやってマリアが黙っているのが、一番辛いんだ。だから、文句でも何でも、思っていることを言ってほしい。ぼくをひっぱたかなきゃ気が済まない、って言うんだったら、そうしてくれてもいいよ……」

これはぼくの本心だ。嘘なんかじゃない。だから何か言ってほしい。ぼくを非難する言葉でも、全然構わないから。

ぼくは祈るような心境になって、思わず目を閉じていた。テーブルに突っ伏す。

目を閉じると、頭の中を色々なことが駆けめぐる。初めてマリアに会ったときのこと、ウィリアムと一緒に、いつもより少し遠出をしてピクニックに行ったときのこと、出征前日にマリアに会いに来たウィリアムのこと……。そして一瞬、ぼくの脳裏をウィリアムの戦死通知がよぎったような気がした。あんな薄くて小さな紙切れで……。

その途端に、ぼくの背後からマリアが抱きついてくるのを感じた。気付かないうちに、ぼくのところに来ていたらしい。予想外のことにぼくは驚いて、慌てて体を起こす。

「どうしたの……？」

普段の大きさの声が出せなかった。やっとの思いで口から出てきたのは、囁くような声。彼女の心臓の鼓動が聞こえる……と思ったら、その正体はぼくの心臓だった。そういうことも分からないくらいどきどきしていた。ぼくは、肩に置かれた白くて小さな手に、手を重ねてみた。ひん

やりとしている。こんなことをしていたら、落ち着けるわけがなかった。

「リチャードを責めるなんて、できないもの」

彼女の口調から、だいぶ落ち着いているらしいことは分かった。

「ずっと、本当のことが言えなくて苦しんでいた人を責めるなんて——私、そんなわがままな人間じゃない」

ぼくはまた大きな息をついていた。でもこれは、ほっとしたから。

「……そう言ってもらえたら、ちょっと安心した」

思わずぼくはそう言っていた。本心からだった。マリアはぼくに後ろから抱きついた状態のまま。まだ心臓のドキドキは止まらない。自分の声もろくに耳に届かないくらいだ。

「でも、約束してほしいことがあるの。いいかしら？」

「——もちろんだよ」

そこでようやく、マリアはぼくから離れた。ものすごく久しぶりに彼女の顔を見たような気がした。泣きはらした赤い目を見るのは辛かった。ちょっと恥ずかしそうに笑っている。その気持ちを隠すように、今度はぼくに真正面から抱きついてきた。やっぱり驚いたけれど、反射的に抱きとめていた。

「……ずっと、一緒にいて」

頭の中に言葉はすんなり入ってきたけれど、なかなか理解できなかった。

「い、一緒って……どういう意味？」

「ウィリアムみたいに私を残して死んだりなんかしたら、許さないから」

「それなら大丈夫だよ。ぼくは滅多に病気もしないし、でも体の自由がきかないから軍隊に召集されることもないし——簡単に死んだりしないよ」

思いつくままに言ってみたものの、立派なことではなかった。自慢できるものでもない。

「……自分で言って、情けなくなっちゃったけど」

マリアはしばらく何も言わなかった。どうしたんだろう、と思っているとぼくを見上げた。ようやくおとなしくなったと思った心臓が、また元気に跳ね回る。見慣れているはずのマリアの顔が、いつもと違って見えた。

「私、こんなに嬉しいと思ったことはない……ありがとう」

そして微笑んだ。笑顔も今までとは違っていた。

「ぼくはウィリアムみたいにたくましくないから、マリアのことを守るなんて言えない……でも、何があっても一緒にいる。一緒にいたい。ぼくができるのは、それだけだから」

自分の気持ちが、こんなに簡単に、正直に言えるものだとは思わなかった。今までは一体、何だったんだろう。当然ながら、ぼくに答えが出せるものではなかった。

ぼくは、もう一度大きな荷物を肩から下ろしたような気がした。今のマリアとの約束は、全く負担にならない。

——誰かに必要とされていること以上の幸福は、ないと思う。役立たずだと思っていた自分が、そうではないと分かるのだから。